

介護技術講習会受講生の「介護過程」に関する意識調査

綾部 友絵

A Consciousness Study of Students Taking the Lecture of Nursing Care Skill, “Kaigo-Katei”

Tomoe AYABE

現状・目的

2007年に高齢社会から超高齢社会へ突入し、介護の問題は国家全体の問題となり、厚生労働省（以下厚労省）もかなり重要視している。とりわけ、現今の介護問題の核心は、マンパワー不足によるもので、介護労働安定センターの調査（H19年調査）では介護福祉士の1年間の離職率は21.6%と前年の20.3%を上回ってしまった。職種別でいうと、訪問介護員16.9%、介護職員25.3%と圧倒的に施設で従事する方の割合が大きいことがわかる。今後ますます高齢者が増え、介護の専門職が求められることは誰もが分かっていることであるが、現実には介護の離職がすすんでいる。

この背景には何が考えられるのか。第一に労働と賃金の問題が挙げられる。施設での介護は24時間体制のため、夜勤業務がある。夜勤業務は、一般的に50名の入所者に対し、2名程度の職員で、利用者の安全と睡眠を守っている。以前はベッドからの転倒防止のために使用していたベッド柵などは、介護保険の適応により、個人の尊厳を重視するため、柵などはせず、見守りや、センサーマットなどでその安全を確保する。そのため、精神的にも集中しなければならず、業務の終了時は、体力だけでなく精神的にも疲労する。このような激務の中でも、介護福祉士の平均的月收入は14～20万円程度である。

しかし、介護の仕事は、大変な激務ではあるが、高齢者や障害者の方々との出会いや、触れ合いの中で何ものにも代えがたい感動と、深い学びがあるために、仕事としてのやりがいは高い。従事されているほとんどの方が、このやりがいを誇りに仕事をされており、日本の介護はこの方々の誇りによって支えられているといっても過言ではない。また、厚労省の調査により、介護福祉士の資格を持ちながら、現在は介護職には就いていない「潜在介護福祉士」のうち、64%の方が給与などの条件が合えば復帰を望んでいることがわかっている。

介護職の離職が進む一方、介護福祉士国家資格の取得を目指す方が急増した。介護福祉士の国家資格を取得する方法として大きく分けて2つある。1つ目は本学のように養成施設を卒業と同時に付与資格を得る方法（国家試験免除）。2つ目は介護職としての実務経験が3年以上で、国家試験を受験し資格を得る方法である。取得を目指す方々が急増したのは、この後者の方々である。

そこで、厚労省が平成16年10月に官報の号外第299号で社会福祉士及び介護福祉士法施行規則の一部改正する省令で「介護技術講習」の実施を発表し、全国の介護福祉士養成施設で「介護技術講習」が開催され4年が経過し一部の県では、講習会を終了しているところもあることは、すでに周知のことである。そもそも、この平成16年の改正の趣旨としては、介護福祉士試験の実技試験受験者が年々増大していること、受験者の実務経験者等の質の向上も重要な課題となっていることである。そのため、介護福祉士指定養成施設を実施主体とし、介護に関する専門的科目・技術についての講習を修了した者については実技試験を免除する制度を導入することにより、介護福祉士試験の受験者の資質の向上及び介護福祉士試験の適正実施に資することとなった。

実技試験が免除となるためには、厚生労働省より指定された一定の実施要件を満たした施設で受講する必要があり、本学も平成18年度より、指定養成施設として介護技術講習会の実施を行っている。3年以上の実務経験を経て32時間以上の介護技術講習会を受講し、その年から3年以内に筆記試験に合格をしなければ、この講習会で取得した32時間は無効となり、再度受講しなければならない。

この様な厳しい条件を乗り越えてでも、介護福祉士資格取得を目指す方々の多くは、一度は企業に就職したが、やりがい求めて介護の道を選んだ方。家族の介護を通して専門的知識を身につけたいと考えている方など、思いは様々であるが、ほとんどの方が介護職に対するやりがいを求めて、有資格者として必要な判断力となる知識や技術を身につけたいと思い受講を希望されている。

その介護技術講習会で習得する科目の一つに「介護過程」がある。一般的に「介護過程」はケアマネジャーがケアプランを作成するために使われるものと認識されているが、本当はすべての援助に於いて、一人一人に対して、どの援助方法が適切なかを分析して的確な援助を行うために常に必要な思考過程である。(詳細については先行研究・綾部2007参照)

技術講習会を受講されているほとんどの方は、現場で介護業務に携わっているが、ケアマネジャーが作成したケアプランに基づいて、介護を実践しているため、「介護過程」とは常に必要な思考過程であるということ認識しているのか疑問に思った。

「介護の専門性とは何か」と問われても、はっきりとした理論が確立していない中、介護の専門性を確立するのに必要なものは、専門的に判断できる能力であり、そのためには、専門的知識をもとに観察力を高め、その情報を分析する一つの思考過程として「介護過程」があると考え。

「介護過程」を用いて分析したものをエビデンスとして、介護に関わるすべての人が理解し、実践に活かすことが必須と考える。ケアマネジャーが立案した、ケアプランの遂行だけでなく、その遂行の中で疑問を見出し、それを解明するために観察力を高め、自分の考えを仮設し、その仮説を検証していく過程こそ、科学的思考であり、介護過程と共通する思考過程であると考え。その思考法を身につけることで、介護福祉士による介護によって質が向上し、「介護の専門性」が確立してくるものと考え。

しかし、介護福祉士国家試験の試験科目には「介護過程」という科目はないため、国家試験を受験して資格を取られた方の多くは、「介護過程」の理論を学んでいない方が多い。介護技術講習会に「介護過程」という科目が入り、多くの時間が設定されていることから、この理論を今後の介護に活かしていく必要性が高いことを意味している。そのため、今回、技術講習会を受講する方々は、現場で介護を実践されているなかで「介護過程」をどのように認識されているのか。また、現

場での必要性があるのかなどの疑問が生じた。

そこで、平成20年度に本学で介護技術講習会を受講された40名の方々に、「介護過程」を受講する前後に「介護過程」に関する意識調査を実施し、認識がどのように変わったのかを調査し、分析をしてみる。

1. 調査方法・内容

調査期間：平成20年7月26日（金）・8月3日（日）

調査対象：平成20年度 本学で介護技術講習会を受講された40名

1) 性別：女性 35名 男性 5名

2) 年齢：20代 2名 30代 10名 40代 14名 50代 14名

3) 介護歴：3年以下 11名・5年以下 18名・7年以下 3名・10年以上 7名

調査方法：「介護過程」の受講前と受講後で「介護過程」の認識の変化について問うアンケートを行う

調査内容：

受講前は「介護過程」という言葉をはじめて聞く方からすでに実践している方まで様々な認知度が考えられるため、受講前と後の「介護過程について説明できるか」について「1：説明できない」から「4：説明できる」までの4段階評価で行い、また、「現場で介護過程を必要と感じることがあるか」について「1：よくわからない」から「5：非常に必要と思う」までの5段階評価を行い、各データには数値を付けて集計した。結果は、平均±標準偏差で示し、群間の比較は対応のあるスチューデントt検定で行い、 $p < 0.05$ をもって有意差ありとした。

2. 仮説

本事例の対立仮説は「介護技術講習会で介護過程を受講前後で、現場での介護過程の必要性の感じ方に差がある」とし、帰無仮説を「介護技術講習会で介護過程を受講前後で、現場での介護過程の必要性の感じ方に差はない」とする。

3. 調査結果・考察

アンケートの項目は複数設けたが、以下の2項目は受講前も受講後も同じ項目を設定したため、介護過程の必要性を受講前後で比較する対象項目とした。その結果をまとめた。(表1)

表1 介護過程の理解度及び必要性の項目内容と平均値及び標準偏差() : SD

項目内容	受講前	受講後	p
介護過程について説明できるか	1.875 (0.883)	2.700 (0.687)	p=0.000 有意差あり**
現場で介護過程を必要と感じるか	3.850 (1.673)	4.450 (1.085)	p=0.095 有意差なし

その結果、「介護過程について説明できるか」については $p = 0.000$ で $p < 0.05$ をもって有意差ありとしていることから、受講することによって、介護過程の理解度は高まったと言える。

しかし、「現場で介護過程を必要と感じるか」という介護過程の必要性を問う質問については、 $p = 0.095$ であり有意差は認められなかった。受講前より平均値が3.850と高く、受講後の平均値も4.450と高くなってはいるが、受講生の多くは、介護過程の必要性に関しては、すでに受講前より意識が高かったと思われる。

本研究では介護過程の受講前後で、介護過程の理解度が高まれば、必然的に必要性も高まると考え、対立仮説は「介護技術講習会で介護過程を受講前後で、現場での介護過程の必要性の感じ方に差がある」とした。理解度の差は認められたが、必要性について差は認められなかったため、帰無仮説は棄却されなかった。よって仮説は成立しなかった。

表2 介護過程の必要性についての自由記述内容

自由記述内容	人数
利用者本位の考え方が非常に大切・利用者のあるべき人生を捉える	6
できること・できないことで捉える事が大切・プラス面を重視する	12
各職種と方向性を統一するために必要	5
利用者の自立を高めるために、関わる全ての人の認識が必要	7

受講後のアンケートに「今後現場で介護過程の考え方を取り入れる必要があると思うか」の質問の答えとその理由について、自由記述欄を設け、意見を求めたところ（表2）以前は、利用者のできていないことにばかり視点が行きがちであったが、それだけではなく、その方のできていることを見つけプラス面を伸ばしていくことの大切さを理解したという意見が最も多かった。これは、介護過程の講義のベースとなったICFの基本的な思考過程で、この意見が最も多かったということは、講義の理解度が高くなれば、現場に生かす必要性が高くなるとしていた仮説を裏付けるものと考えられる。

¹⁾黒澤らは「介護過程とは、老い、病、心身の障害などに起因して日常生活に支障（困難）を生じている人々への生活支援の一つの領域で、（中略）介護過程は、介護をどのような方法（手順）をもって行うのかを明らかにする。すなわち、介護は実践の過程をみることではじめて全体像が理解できる。」と述べ、介護職の有する専門的知識・技術をもって行われる生活支援活動の展開方法と、人権を中核とする社会的な価値を実現するという2つの視点があるとしている。

介護過程という思考過程をマスターし、実践に活かすためには観察力を高める必要がある。この観察力は、机上や文献から学ぶものではなく、多くの方と関わり、コミュニケーションをとおして試行錯誤した結果身につくものである。そのため、すでに現場で多くの方と関わり、介護を実践されている受講生の方々には、すでに培った観察力を思考過程の情報源として活かし、介護過程を現場にとり入れることで、利用者の個性性である、その方らしい生活を支援することに繋がる。また、その方の人権を尊重し、本人が達成感を味わう支援を実現することで、介護の質の向上に繋がり、介護職としてのやりがいを感じる瞬間であると考えられる。

4. まとめ

現場での実務経験を積んで、介護福祉士の資格取得を目指す方々は、基礎や理論を学んで実践へ向かう学生とは違い、介護過程という理論を学んでいないため、現場で介護過程という思考過程を必要としていないのではないかと考えていた。しかし、介護技術講習会で介護過程を受講する前から、この思考過程を現場で生かす必要性については高い意識があることがわかった。だが、具体的に介護過程を理解しているわけではなかった。そのため、受講後の理解度の変化が大きくみられた事は、漠然としていた「介護過程」という思考過程を理論的にとらえることができたと考える。また、受講後に「この思考過程を介護に携わるすべての人に認識が必要」という意見も多かったことから、はじめに問題で述べた「介護過程」をエビデンスとして、介護に関わるすべての人が理解し、実践に活かすことが必須で、介護福祉士による介護によって、介護の質が向上し、「介護の専門性」が確立してくるという考えに一步近づいたといえる。

おわりに

現在、介護職を取り巻く環境は良いとはいえない。しかし、本学の学生をはじめとして、今回研究対象であった、介護技術講習会の受講生やこれから資格を取りたいという方も、利用者である高齢者や障害者の方に対して、適切な介護を提供したいという思いが強くみられる。介護を提供する側のやりがいや、充実感・達成感が強くなれば強くなるほど、その思いは利用者に戻元される。介護職を養成する側に求められている「介護の専門性を高める」という事も、介護に携わる方々の満足度を高めることにあると考える。

介護職が充実感を抱き、3Kと言われながらも、やりがいを感じて、今後もこの仕事を続けていけるように、どのような点が現場から求められているのか、この講習会を機会にさまざまな調査を行い検討課題としていきたい。

今回のこの研究をまとめるにあたって、この講習会で講師としてご指導をいただいた、諸先生方のご協力の下まとめることができましたことを、深く感謝いたします。

引用文献：

- 1) 黒澤貞夫編著ほか『ICFをとり入れた介護過程の展開』建帛社 2007 p3

参考文献：

- 1) http://www.kaigo-center.or.jp/report/h19_chousa_01.html 平成19年度 介護労働実態調査結果について（検索日：2008年10月09日）
- 2) 『平成16年10月19日 官報 号外第299号』 3分冊の1-3
- 3) 綾部 友絵 2007 「介護過程指導の展開と今後の課題」『宮崎女子短期大学紀要』第34号p p1-16
- 4) 「介護過程の教育方法を探る－利用者理解のための情報収集シートの検証－」 柗崎京子ほか『介護福祉教育』No. 25 日本介護福祉教育学会 2008
- 5) 前掲書 佐藤郁子ほか「介護福祉士の専門性に関する調査」
- 6) 黒澤貞夫 『生活支援学の構想 その理論と実践の統合を目指して』川島書店 2006